



風を見た人

下

水上 勉

講談社

風を見た人(下)

昭和四十八年三月四日 第一刷発行

昭和四十八年四月十六日 第四刷発行

著者 水上勉

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 六八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 水上勉 昭和四十八年

---

Printed in Japan

0093-126131-2253 (0) (文1)

目次

第二十章

十七歳の肌

7

第二十一章

醜聞の街

54

第二十二章

軍鶏しゃもの宿

97

第二十三章

炎

143

第二十四章

根のない草

223

第二十五章

いのちの花

260

第二十六章

風はいつでも吹いている

311

終章

露のいのちを

367

装幀／丹阿弥丹波子

風を見た人（下）





## 第二十章 十七歳の肌

### 1

静雲荘は、大久保の駅から歩いて十分とかからぬ距離にある。中央線に沿うて、ガードのわきから東中野の方へくると、丸い大屋根の青果市場へ出るが、そこからまなしの住宅街のまん中だった。戦前はこのあたり、かなりな個人住宅が密集していたが、戦災で焼けてから、小区割のバラックが建ち、そのバラックも第二期改築を終えて、いまは混んだ殺風景な住宅街である。国電の窓から、線路下に、赤やブルーの屋根瓦をみせたマッチ箱のような家々が櫛比していた。むかし、といっても、昭和十七年に、弥千枝の母のちよが、武藤甚弥を訪れてきたアパートは、ここから少し東中野よりあって日本閨の裏を流れる神田川に沿うた川添町だったが、十数年後に娘の住んだアパートは、や

や東よりの住宅街にあって、建物もまだ新しい。齒医者をやっていたという大家が、自分の土地の一部に七部屋ほどある真四角な二階家を建て、三年ほど前から間貸しをはじめたもので、静雲荘というが、このあたり、同名のアパートがかなり多かつた。豊多摩病院と青果市場の建物が、大きく空を割っているのは戦前とかわりないが、戦後は少しごみごみしてきていた。弥千枝は、このアパートの二階の角部屋にいた。四畳半だったが入口に半畳のガスコンロと洗い場があり、靴ぬぎ場もある。押入れもあった。まあ、女ひとりの部屋ならこれでよいといえたが、木村美千代とふたり床をならべて寝ると、少し狭かった。美千代が、死んだ姉の荷物を周囲にべったり積んでいるからである。木村美千代は新潟県の新発田市の出身で、新潟市へ出て木工会社の事務員をやりながら、好きな洋舞をやっていた。戸叶舞踊研究所では古参株だったが、姉をたよって、一年ほど前、東京にきて、いま、この柏木町五丁目一〇三番地に、レッスン場をもつ高田せつ子舞踊研究所につとめた。姉がここに働いていた関係からでもあるが、美千代は、高田せつ子の秘書のような役をしている。

高田せつ子は、戦後の混乱期に発足した舞踊家の中では異色だといわれた。民俗舞踊を売り物にしていたが、いつてみれば、洋舞と日本舞踊をミックスしたような、当時

としては、新機軸をゆくものといえた。レッスン場には、毎日三十名近い弟子たちが、週一どの稽古をうけにくる。せつ子も年に二回、公会堂やホールを借りて、本公演をやった。研究生の総出演による群舞が毎年売り物になっていた。

弥千枝が、木村美千代を知ったのは、新潟の戸叶舞踊研究所である。美千代は、姉の遺骨をおさめに新発田へ帰った際、古町の研究所に顔をみせて、顔いろの冴えない、弥千枝をみて、偶然、はなしかけてきたのがきっかけになって弥千枝の家出の手助けをする結果になった。弥千枝は、美千代に、家庭の事情をつまびらかにはなしていた。一日も新潟にいたくないから、何とか上京するための力になってくれと頼んだのである。もともと、弥千枝は一つだけ肝心なことを偽わった。踊りのために東京へゆくのだったら、母親は許可してくれるということであった。美千代は、弥千枝に同情していたので、東京へ帰ると、すぐ高田せつ子にその話をした。せつ子は、ちょうど、身の廻りを手つたってくれる少女を欲しいと思っていた矢先だったので、備い入れてよい、といった。話がとんとん拍子にすすんで、弥千枝へその由を手紙でしらせると、弥千枝は、返事もよこさずにもうやってきた。これが真相である。

弥千枝は、戸叶舞踊研究所で、中学時代から美千代と一

しよだったこともあるので、よく知っている。高田せつ子も、新潟で小さい頃から、勉強してきた子だと聞いて、興味をもった上に、家庭の事情もきけば、尚更、弥千枝が好きになったらしい。

「このまま、放つといったら、弥千枝さんは、めくらめっぽうに東京へ出てきて、なにしなあるかわからんですから、あたしも、心配です。先生、どうか、お世話してあげて下さい」

と美千代はいったそうだ。また美千代は弥千枝に、

「そのかわり先生について、みっちり勉強しなさいよ。」

附人<sup>つきり</sup>いったって、毎日、先生のそばにいて、踊りをみてるんだから、先生の技術を盗むのには、もってこいのお仕事なのよ。勉強次第で、すぐ幹部になれるから」

とはげました。

弥千枝は、好きな舞踊も出来、しかも噂にきいていた有名な民俗舞踊家高田せつ子の世話が出来るときいて有頂天だった。自分の道が、急にひらけた気がして、飛んできた。

木村美千代は、背はそんなに高くはないが、均整のとれた、要所要所に肉づきをみせる、いかにも、踊り子といったかんじのする娘だった。二十四歳。まだ独身である。新発田に父母がいて、農業をやっていたが、家庭はまあ中流といえた。美千代は中学を終えるとすぐ戸叶舞踊研究所に

きていたから、新潟時代の基本を生かして代稽古役だった。弥千枝は、そんな先輩を頼って上京できたことに感動していた。

新潟大学病院の田島樹一に、あんな気負った手紙を書いたのも、じつは、このような事情で、弥千枝の生活に明るさが出たからだった。

ふたりは、静雲荘から、約五分でゆける舞踊団のレッスン場へ、毎朝九時に出た。美千代は、秘書の仕事と代稽古に励み、弥千枝は、せつ子の身の廻りや使い走りを手つた。仕事が終わるのはだいたい六時頃。舞踊団で昼食と夕食をすませて帰るのでアパートは、寝るだけであった。この部屋は、美千代の姉の登喜子が借りたもので、家賃が当时で八千円。内半分の四千円は、高田せつ子が負担していた。弥千枝の前には、似たような上京したての娘が短期間世話になったこともあって、その習慣を、せつ子は踏襲していたのである。

高田せつ子は、ことし五十二歳だが、まだ三十代と思われるようなふりぶり肥ったキメのこまかい軀をしていた。背丈もあるので、舞台映えがした。昭和二十五年頃から、芸術祭女史とまでいわれている。毎年本賞や奨励賞を獲って、その舞踊にも個性があったからだ。が、沖繩、奄美大島、壱岐対馬、出雲、東北秋田の各地方をよく旅してそこ

につたわる古い舞踊を見てヒントにし、モダンな振り付けを試みる才腕は、西洋舞踊全盛の当時にあつては異色だった。ちょうど、風俗的にみても、二十七年ごろから、茶羽織や、着物ブームが訪れていたように、舞踊界にも、民俗舞踊復活の兆<sup>きざし</sup>があつて、高田せつ子はその第一人者といわれたのである。

弥千枝は、このせつ子の附人になったのだ。日数は浅いので、仕事にはまだ馴れていなかったが、目新しいことばかりのつづく毎日が楽しかった。じつさい、弥千枝は、戸叶舞踊研究所で、偶然、帰省していた木村美千代に会えたことは神様に感謝したいほどだった。美千代も、新発田生れである。いわば、同じ越後娘だし、芸妓屋に育った弥千枝に理解があつた。また、高田せつ子が、弥千枝をひと目みて、いい娘を世話してくれたと、美千代に礼をいったのは、弥千枝の母が、むかし、一山流の踊り手として、県民会館で踊ったほどの妓だったこともいくらか理由になっている。せつ子は、弥千枝が、大柄で、美貌で、十七歳にしてはずいぶんませてみえたのに、魅力を抱いた。それでいて、まだ子供供子供してみえるところにも興味をもった。磨き次第では、大物になれる素質をもっている、と判断した。このカンが当たったといわねばならない。

弥千枝は、附人として入ったが、毎日レッスン場で、代

稽古役の美千代が、下は小学校から、上は女子大生にいたる大勢の生徒に、基本を教えるのを見ていた。すべての基本は、戸叶にいて、加代子たちと習い終えているから復習するのに物を言った。弥千枝は、高田せつ子が、創作に頭をなやまして、新しい舞踊をつくりあげてゆく苦勞も、じかに見るのが出来た。まったく、朝から晩まで、音楽と踊りの中で暮すのだから、張りが出ないはずはない。

しかし、東京の生活が楽しければ、いつそう新潟の母のことが心に思われた。それは何といつても、無断でとび出してきることが理由になつていた。それに、母が、何ともいつてこないのだった。もつとも、こっちの住所を教えていないのだから、なにもいつてこなくても、当然だったが、それがまた心配になつた。で、間接的に田島樹一に知らせておいた。ところが、その手紙の反応はなかつた。田島からも何ともいつてこない。母からも云つてこない。

家出する時は、興奮していたから、さつと出てこれた。だが、いざ、東京に落ち着くと、何やかや心配になる。妙だった。憎んでばかりきた母へ、こんな気持の変化がこようとは思わなかつたのだ。

田島へ出した手紙をよんだにちがいない母が、何もいつてこない裏側を想像した。弥千枝がいなくなつたことで、母はほつとしたのではないか。弥千枝さえいなければ、母

は西堀のアパートへ榎本をよぶことも出来る。田島樹一も呼ぶことも出来る。祖母の位牌のある仏壇の前で、榎本と寝ている母の姿を想像すると、煮えかえる憎悪と輕蔑がこみあげた。しかし、それも、日がたつにつれて、母が自由にふるまって楽しければ、それでよいだろうといったあきらめも湧いてくる。

「あんたのお母さんで……、どんな顔になつたわけ。あたし、戸叶先生のところにいた時、一、二ど会っているはずだけど……わすれてしまつたわ」

と美千代が枕をならべて眠れぬままに、故郷の話が出た時、たずねるのだった。

「どんな顔で……、平凡な顔です。いまは、『千代香』の……経営がゆきづまつて、苦勞してゐるんです。そうね。あたしには、冷たい顔ばかりしてました。それでいて他人にはあいそがよいの。芸妓なんかしてた人はみなそんな人が多いわね」

と弥千枝はいつた。佐渡からきていた照代。新発田からきていた香代子。みな、いまは一人前の芸妓として、「初の家」から出ているが、家人入りが不機嫌で、外顔がやさしい女ばかりだった。

「不思議に思うけど、どうして、芸妓さんで、ああなんでしょうねえ。家にいる時と店でみる時と、顔はぜんぜんち

がうんですよ」

と弥千枝はいった。

「それは……お化粧おとしてなるからよ……きつと」と美千代がいった。

「わたしも、芸妓さんの素顔をみたことがあるけど、お化粧して正装して居る時と、ちがっていたんでびっくりしたことがあったわ」

「お化粧以上に……気持の上でも、変りなるんです」

美千代は、芸妓置家の内情などにくわしくはないので、未知なことが多いから、おもしろがってよく訊いた。

「あんたに、こんなこと訊ねて、変だけどさ……水あげて……どんなことするの……よく小説やなんかで書いてあるのよむけど……ほんとに……あんなことってあんのかしら」

弥千枝はいった。

「まだ、お祖母さんが生きてなる時だったから……子供のじぶんです。あれが、水あげだったかと思ったことが一どありました。新発田からきてなあった香代さんだったか。旦那さんが出来て、最初の夜に……待合で泊りなあった。その時に、おなかさんが、寝巻きやら履き物を風呂敷につつんでもってゆきなあったのをおぼえてるんです。小さい時、香代さんによく抱かれて寝てたんで……その夜、香代さん

が帰ってこなかったことが、淋しかった……それで、よくおぼえてるんです。翌朝、げっそりした顔で、香代ちゃんか帰ってきたのをみて、あたし、かなしかった。子供心に、ああ……何かあったな、と思ったんです。それが水あげじゃなかったかと思うわ」

「弥千枝さんは、ずいぶん、おませだったのね」

と美千代はいった。じつさい、そういわれても、不満な気持はおこらなかった。弥千枝は、第三者からそういういわれなくても、自分はおませだと思っていた。

学校でも、弥千枝の大きな乳房は級の誰の眼をも集中させていた。先生だって、弥千枝の乳房をみて、顔を赧くした。弥千枝は早くに月経があったし、乳房はゆたかだった。それに、声がわりも早かった。ある男の先生なんかは、弥千枝が登校してくる姿をみただけでもう、男生徒に悪影響があるのではないか、といったりした。弥千枝は、べつに媚びをふりまくわけでもない。色気を意識して、男生徒にみせてやろうと考えてなぞいないのだが、すべての動作が、エロチックだとみなから云われて困った。

「そんなにエロにみえるんだったら、見なきゃいいでしょ……」

と弥千枝はいったものだ。夏など、薄着で登校すると、乳首の色が服をとおしてうつたし、ぼたぼたとゆれる胸

の隆起は、自慢したいほどふくらんだのだ。

芸妓屋に育ったという以外に、この早熟の原因はみつからない。そうだ、香代子や照代や母が、男と寝て帰ってくる早朝の、あの、ひとり寝の床の中で、どのような男に抱かれてきたのだろうかと、臆測してみるようになったのは、もう十一、二歳のころだった。男と女が寝れば、何をするかぐらいのことは、六つ七つから知っていた。

みんな、母が教えたと弥千枝は思っている。そうだ、自分とはしかに母の血をうけている。

## 2

東京にきて、母の血をうけている自分のはっきり認識できるのは、妙だった。新潟にいる時は、そうとも思わなかったが、古町そだちの、母の血を、そのまま、東京で撒きちらしている自分を知ってがくぜんとする。早い話が、高田せつ子の事務室で、せつ子の客に、茶をだしたり、卓上電話をとりついたり、いろいろと雑用をやる時、その立居振舞いに、どこやら花街育ちの影が出た。弥千枝も背丈がある。足もながい。したがって、お尻がふくらんでいて、少し下目に形よくすわっているその姿が着物を着れば似合うだろう、落ちついたかんじで、スカートの上からもそれ

は客の眼を魅くのだった。お茶ひとつ卓上にさし出す仕草も、花街の匂いである。

「やっぱり、あなたは色町のお嬢さんだわ」

とせつ子はいった。

「女らしくてとてもいいわよ。うちの踊り子さんたちはタイツをはけば男みたいなのとばかりだけど、あなただけはちがうわ。踊り子はなんてたって、姿なんだからね……女らしゅう、ひきつけるに越したことはないのよ……」

にっこりして客の前でも弥千枝を賞める。弥千枝はせつ子からほかの弟子よりも重要視され、賞められるのが嬉しかった。そんなことをいう高田せつ子は、五十二歳という年齢のせいもあり、面長めんちやうなあばた面がどこやらボーイッシュなかんじもした。で、弥千枝が女らしい感じなのが、嬉しいらしかった。第三者にもそれはよくわかるのである。「弥千枝ちゃん、こんど、新潟へ帰ったらね、お母さんを一どつれていらっしゃいよ。あなたが、一しゅうけんめい踊りを習っているところを見られたら、嬉ばれるんでしょね」

と木村美千代はいったが、弥千枝は、母の上京など真平だと思っていた。素直でない母は、もし、弥千枝がこんなところでお茶汲みなどしているのをみようものなら、髪を掴んでつれ帰ろうとするだろう。いや、もうあきらめて、

つめたい眼で一瞥して帰るだらうか。

弥千枝は、とにかく、愛憎半ばする母への思いを、毎日抱いて暮らしていた。田島樹一が、ある日、飄然と、静雲莊をたずねてきたのは、小春日和のあたたかい十一月の半ばである。夜の八時頃であった。ちやうど、夕食時をやりすごして、そこいらでお茶でも呑んで時間をつぶしてきたらしい田島は、管理入室のよこの階段を、ゆっくりあがってきた。灰いろのハンチングをみて、おやと弥千枝は思った。ちやうど、共同洗濯場へポリエチレンのバケツに入れた洗い物をはこぼうとして、出合頭に顔をあわせたのである。

「あら」

と弥千枝の方が叫んだのと、田島がぐくりとつばをのんで、階段の途中で足をとめたのが同時だ。

「やあ……ここにいたぞ」

と田島はにっこりして、

「弥千枝ちゃん……いいかい、ちよつと失敬して……お部屋へ行きたい……お友だちといえるのかね」

「ええ」

と弥千枝は田島の、あいかわらずぶつきら棒な態度に、なつかしさがわいた。

「先生……ずいぶんさがしなあったでしょ。すぐわかりなあったですか」

新潟弁がとびだしていた。

「手紙にはつきりと住所が書いてあったからね。地図をみて……検討をつけてきたが少しも無駄はなかったよ。ガードに沿ってきた。屋根の上のカンバンがすぐ目についたよ」

「どうぞ……あがって下さい」

バケツを足もとに置いて、廊下を走りもどってドアをあけた。いつも、喰べすぎた時は、きまって、横になり、下腹を撫でている木村美千代が、血相かえてきた弥千枝をみて、

「なあによ」

「新潟のね、先生が来なあったの」

と弥千枝はいった。

「ヘッ」

と美千代はとび起き、スカートの裾をなおして、部屋の隅の座蒲団を真ん中へ出した。と、もう戸口に田島がにゅつと顔を出していた。

「お邪魔します」

とにこにこしている。

「ほくは、弥千枝ちゃんのお祖母さんの主治医です。はじめまして……このたび、鎌倉へちよつと帰ったついでに、ここへ寄ってきてくれて……お母さんからのまれたも



んですからね」

田島はじろりと鋭い眼で美千代をにらんでから、部屋のまわりの、いやに、たくさんさんの荷が、置かれてあるのを眺めやり、

「何んもいりません。お茶もいらない……ちよっと、おはなしすればいいんだ」

といって、上りはなへ近いところに坐った。

「どうぞ」

と美千代が座蒲団をすすめるのに、田島はうなずきかえすだけでうけとらず、弥千枝が、不安な眼<sup>まなこ</sup>ざしで、じっと立ちすくんでいるのを見あげて、

「しばらく見ないうちに、美しくなったなア」

といった。

「そうですか。お世辞でしょ。先生」

弥千枝は、ガスコンロに火をつけて、ヤカンをかけながら、

「お母さん元気でしょうか」

と先手を打った。じつは、田島が何を云いだすかわからないからであつた。美千代には、母のゆるしを得ての上京だと嘘がついてある。

「ああ、元気だ。あいかわらず、頑張ってるよ」

「あたしね……先生」

弥千枝は、美千代の方をちよっと気にしながら、  
「お手紙に書かなかつたけど、高田せつ子舞踊研究所に通つてるのよ」

「ほう」

田島はタバコをとりだして、

「高田せつ子つてきいたことがあるな」  
と火をつけた。

「民俗舞踊界の大御所<sup>おおご</sup>です」

と弥千枝は自慢げにいった。

「先生にくわしく云おうと思つたんですけど、機会がなかつたの……この方ね、木村さんていうの、あたしを、古町の戸叶さんところからこちらへ世話して下さつた方です」  
「ほう」

田島は、想定してきた青写真が、いま次第に焼付けされて、鮮明になるのを眺め入るような眼で、

「あなたが木村さんで……ああ、そうでしたか」

ようやく筋書きが呑みこめる、

「それにしても心配したなア」

と田島はいった。

「急だったから……」

「すみません」

木村美千代は、ちよっと不審な眼はしたものの、